

中国国家図書館音楽映像資源の収集、保存と提供

中国国家図書館外国語情報収集・編集部主任 顧韋^{こまへん}

中国国家図書館は国家の総書庫であり、国家書誌センター、国家古典籍保存センター、国家典籍博物館でもあります。国内外の図書文献の収集と保存という職責を果たし、全国文献保護事業の指導・調整を行っております。また中央と国家指導機関、社会の各界及び公衆のために文献情報とレファレンスサービスを提供しております。図書館学理論と図書館事業発展の研究を推進し、全国の図書館の業務に指導を行っております。対外的には文化交流に関わる役割を果たし、IFLA及び関連する国際組織に参加し、国内外の図書館との交流及び協力事業を展開しております。

『国家図書館“第十二次五か年計画”要綱』¹には、次のように記されております。“文献情報保障の能力をさらに向上させる。国家文献資源総庫の構築に重点を置き、文献の収集範囲を絶えず広げ、図書館所蔵資源をより合理的に構築する。出版物の保存制度を更に完全なものにし、文献の納本率を常に向上させ、未所蔵文献の補充を実質的に進展させる。”

国家図書館の非図書資料には主として音楽映像資料、パッケージ系の電子資源、マイクロ資料等が含まれております。日本側からご提出頂いたトピックのうち、私たちは音楽映像出版物の状況について重点的にご紹介いたします。

一、音楽映像資料サービスの開始

1987年に白石橋の新館が落成し、特別に組織（組）が立ち上げられ、あわせて館内の一部に音楽映像資料用の購入・書誌作成・閲覧・保管エリアが設置されました。三つの視聴覚室、一つの書庫が配置され、録音室、機器室及び撮影編集室の機器はすべて日本ビクター社の、当時としては最も先進的な設備を揃えました。当時の新館開館と利用者サービスの需要に対応するため、全館の各部門から人員を集め、さらには音楽、映像に造詣が深い者を集めました。開館後の十年は、当時の社会経済的条件に制約があり、音楽映像資料及びその設備はまだ普及しておらず、人々のこれら新型文献への需要は切実なものであったため、視聴覚資料の利用者サービス数は全館の業務統計データにおいて上位にありました。

二、音楽映像資料の収集業務

20世紀の80年代末から90年代初めにかけて、音楽映像資料の収集は主に購入と寄贈によって行っておりました。当時の中国における音楽映像市場は始まったばかりで、種類と設備の技術要件において限界があり、収集は主に中国図書輸出入総公司を通じた海外の古

¹中国国家図書館が2010年末に発表した、2011年-2015年の期間における戦略的な方針。第31回日中業務交流の基調報告「中国国家図書館の発展構想と戦略計画」で紹介されている。
中国国家図書館 HP 上の紹介：http://www.nlc.cn/dsb_footer/gygt/ghgy/#21

典音楽、映像作品の購入によっており、大多数はLPレコード、ビデオテープ、LD等でした。

国内の音楽映像資料の発売状況に基いて、一部の語学学習及び通俗歌曲等の録音テープを購入し所蔵しておりました。北京音楽映像資料館と協力して百あまりの中国民族楽器楽曲、中国古典音楽の録音テープを作成いたしました。テレビ局と連携して、保存・利用価値のあるテレビ番組を録画して図書館の所蔵を充実させました。このほか、日本政府より寄贈頂きましたVHDディスク200本あまり及び再生設備の受け入れを行いました。また日本の志鳥栄八郎²様より寄贈頂きました2万枚余りのCD等を受け入れました。21世紀に入り、国内出版社からの納本を受け入れ始め、中国語資料は主に納本によって収集し、同時に一定数の録音・録画資料を購入し図書館の所蔵を補充しましたが、外国語資料は依然として購入を主としておりました。年間の図書館の所蔵数は2001年の3,000種余りから、現在は約12,000種に増加し、所蔵数、メディアの多様性、コンテンツに関してすべてが全国のトップを行く地位にあります。

主な収集方式は納本、購入、交換、受贈、募集、分配の受け入れ等です。それぞれの所蔵資源につき1、2の複本を揃えます。当面の実務においては、納本と購入という二種類のルートを主とし、少数の資源は団体あるいは個人からの寄贈、その他の部署からの転入等の方式を通じて入手しております。

三、目録作成業務

音楽映像資料の目録の編集加工、書誌データの作成は、手作業によるカード目録の編集からコンピュータによる書誌データ記録の過程を経て、音楽映像資料書誌データベースが構築されました。

20世紀の80年代、音楽映像資料のコンテンツに関するジャンルや数には限りがありました。LPレコード、録音テープ、ビデオテープ、LDが主なメディアであり、書誌記述の内容もよりシンプルで、分類索引は主に大きく分けて音楽(J6)と映画及びテレビ芸術(J9)の二種類でした。所蔵している音楽映像資料の請求記号は書架記号であり、メディアタイプコードに基づいて一連番号を付与しておりました。90年代までに光ディスクが出現すると、ようやく既存のビデオテープやレーザーディスクにとって替わり、先進的なデジタル化技術、ストレージ技術が音楽映像資料のメディアタイプを多元化(パッケージ系と仮想系)の方向へと発展させました。2001年、組織機構の改変及び中国国家図書館のAleph500システムの使用により、音楽映像資料の書誌データ記録及び書誌記述の標準化、規範化のステップが加速しました。メディアタイプがさらに区分され、目録規則や、対応する機械可読フォーマットの各フィールドの使用ハンドブックが編集作成されました。音楽映像資料の目録データベースが、収集、アイテムの追加から所蔵情報に至るまで遡及され完備され、請求記号の付与ルールが改訂されました。内容分類や主題索引は中国図書館分類法のあらゆる大分類に影響を及ぼしました。

現在では音楽映像資料目録データは約18万件あり、中国国家図書館書誌データベース

² 志鳥栄八郎(1926-2001)音楽評論家。

の一定の割合を占めており、このほか 2012 年『中国国家書目』は音楽映像電子資源書誌データを収録範囲に加えました。

しかしながら、音楽映像資料の目録の編集は確かに一定の困難を伴います。まず、音楽映像資料の言語は確定が困難であり、志鳥栄八郎様から寄贈頂いた多くの CD は、そのパッケージには日本語が記されておりますが、コンテンツは英語、ドイツ語、イタリア語などであり、そのため中国語データベースと外国語データベースに重複データが発生したり、利用者が検索でたどり着けないといった状況が発生しました。第二に、版の確定も一つの問題であり、同じ楽団の同じ演奏の録音 CD であっても、異なる国から出版されると、目録作成が重複するということが度々出現します。第三に、音楽映像資料の目録の編集には設備を用いた閲覧が必要であり、目録作成要員の能力と業務効率のどちらにとっても一つの試練であります。

四、利用者サービス

20 世紀 90 年代後半には、CD、VCD の出版発売が市場の需要を豊富にしました。しかしながら、経済的要因の影響により、人々の購入能力には限界があり、そのため図書館は人々の学習と素養を高めるために選択される場所となりました。当時の中国国家図書館音楽映像資料組の利用者サービス形式は以下のとおりです。

1. 個人向け視聴覚サービス

個人専用の視聴覚資料室を設け、利用者にモニタとイヤホン等の設備を提供し、業務スタッフが利用者の要求に基づいて施設内で録音設備、ビデオ設備などによって利用者に録音・録画番組を提供いたしました。その後ネットワーク技術と電子ビジネスの迅速な発展にともない、ウェブ情報資源の共有と交流が、次第に単一化及び個人化された視聴覚サービスにとって替わりました。

2000 年、個人向け視聴覚設備はパソコンへと変わり、豊富な図書館所蔵資源を利用してデジタル化加工を行い、利用者にビデオオンデマンドサービス、すなわち VOD を提供しました。サービス形式の変革は、さらに多くの利用者を引き付け、利用者サービス数をピークへと導きました。

2. 団体向け視聴覚サービス

リアプロジェクションテレビ³とプロジェクターにより映像作品を提供いたします。このほか、団体予約を受けての貸切映画鑑賞会、学習会ができます。

3. レファレンスサービス

利用者の要求に応じて楽曲や映像シーンを探し、録音・録画テープまたはディスクに複製し、利用者の使用と保存に利便を図ります。

4. 音楽映像資料クラブ（会員制）の設立

³ 画面をスクリーンに見立て、背面から投影する、主に業務用の大型テレビの一種。

一部の音楽映像資料を開架し、館外貸出を行い、定期的に会員に対して図書館所蔵の優れたクラシック音楽アルバム、映像作品を推薦したり、音楽サロンを開いたりします。また、業務スタッフまたは会員自身が講師を担当し、毎回一つのテーマで講演をおこなうなどして、固定的な利用者を育成しています。

2009年、国家図書館二期工事が完工し、一期部分の改修を行いました。これに伴ってパッケージ系音楽映像サービスを停止しました。現在は主にネットワークサービスの方式を採用しております。

五、デジタル化加工

弊館の音楽映像資料デジタル化業務は1999年に始まり、初めは録音・録画資源の応用サービスの需要を満たすため、模索的に音楽映像資料デジタル化変換業務を展開し、高密度ディスク、レーザーディスク、ビデオテープ、VCD、DVDの5種類のビデオ資料とLPレコード、カセットテープ、CDといった3種類のオーディオ資料に対して異なるコーデックフォーマットの実験を行いました。その後、私たちは音楽映像資料の保存、保護と伝承に力を入れ始め、デジタル資源が“長期保存と応用サービス”の原則を満たすことを堅持してまいりました。そして、早期のデジタル化実験リソースに対する遷移の検証、LPレコードの実験的デジタル化及びデジタル図書館標準に基づいた図書館所蔵音楽映像資料デジタル化等の複数のプロジェクトを展開してまいりました。具体的には以下のとおりです。

1. データの品質検査と遷移業務

2012年に“自作録音・録画資源の検証及び遷移”プロジェクトを立ち上げ、主に早期の実験的プロジェクトについてディスクの検証、ストレージ構造・ファイル命名・技術パラメータの統一を行いました。また、メタデータ情報の補充、メタデータと対象データとの対応関係設定、記憶媒体における可読性の保証等も行いました。このデータ品質検査と遷移業務は、リソースの完全性と有効性の検証を完成させただけでなく、これまでの問題と経験についても総括するものとなり、問題データの精査に係るさらなる処理について業務の基礎を強固なものとしたしました。

2. LPレコードデジタル化の実験業務

弊館のLPレコードの大部分は20世紀の1980年から1990年代に購入して取得したものであり、コンテンツは世界のクラシック音楽がメインで、極めて高い保存価値を有しております。ただし保存時間の長期化や保存環境の制限により、一部のアルバムには変形、酸化等の現象が出現しているため、適切なデジタル化の方法を模索し、保護及び保存を速やかに行う必要があります。そこで、2013年に“国家図書館LPデジタル化実験”プロジェクトを展開いたしました。プロジェクトは、国内外のLPレコード保存とデジタル化発展の現状とを結びつけ、弊館が所蔵するLPレコードの具体的な状況に対応するような、LPレコードに最も適した保存、保護及びデジタル化加工の方法を研究いたしました。最終的には、国際音声・音楽映像アーカイブ協会(International Association of Sound and Audiovisual

Archives, IASA)が制定した『音声遺産のメンテナンス:規範、原則と保存戦略』(IASA TC-03)、『デジタル音声を対象とする制作及び保存の指導方針』(IASA-TC 04)を、弊館におけるLPレコードデジタル化業務の参考基準とすることで確定し、これにより弊館が正式なLPレコード業務を展開する上で堅実な基盤が築かれました。

3. 図書館所蔵音楽映像資料デジタル化業務

国家デジタル図書館プロジェクトは、デジタル図書館標準規範体系を重視して設立され、このうちデジタルリソース構築の標準規範は、デジタル対象の加工・記述・組織・ストレージ・検索・サービスに及びます。また、『音声ファイルデータ加工基準及び業務規範』、『ビデオデータ加工基準及び業務規範』『専門分野メタデータ基準及び著者目録規範—オーディオ』、『専門分野メタデータ基準及び書誌記述規範—ビデオ』、『国家図書館デジタル資源長期保存規範』等のプロジェクトや研究を次々に展開し、デジタル化を行うための事前準備業務を正式に展開いたしました。2012年、弊館は新たな段階の図書館所蔵音楽映像資料デジタル化プロジェクトを立ち上げましたが、その意義は、パッケージ型資源にデジタル化加工を施し、その提供方式を変えることと、利用者へネットワーク音声画像サービスを提供するために、既存資料についても整理と保存を行うこととにあります。

デジタルリソースは、保存レベルとサービスレベルの二種類のレベルに分類しています。このうちビデオについては、保存レベルでMPEG-2コーデック、AVIフォーマットを採用してパッケージングし、サービスレベルでH.264コーデック、FLVフォーマットを採用してパッケージングいたしました。オーディオについては、保存レベルでPCMコーデック、WAVフォーマットを採用してパッケージングし、サービスレベルでMP3コーデック、MP3フォーマットを採用してパッケージングいたしました。2014年末までに、デジタル化音楽映像資料は合計2776種類、約18.7万分となりました。このうちビデオは824種類、約5.9万分であり、オーディオは1952種類、約12.8万分、総容量は約10TBでございます。目下、すべてのデジタル化資源は“国家図書館録音声ビデオデジタル化リポジトリ”ウェブサイト上で配布されています。

六、業務フロー

数年来、国家図書館は“一匹の龍(一貫方式)”という名の業務管理モデルを採用し、音楽映像資料の管理に応用してきました。すなわち、情報収集・編集業務を集中的に管理し、業務における中継点を減少させ、文献資源の受入からサービス提供までのタイムラグを短縮させたのです。また、独立した収集により、収集業務の積極性とスピーディな反応能力とを強化しました。すなわち、所蔵、利用を一体化させた利用者との直接のコミュニケーション、より早く、より全面的な利用者需要の把握、デジタル加工及び撮影・編集の自給自足を可能としたことで、音楽映像資料の図書館コレクション構築をかなりの程度で有効に促進しました。ただし、この種の自給自足体制という優位性は、他方で管理上の弊害ももたらしました。例えば音楽映像資料の特殊性のひとつである貸出補助設備の使用においては、コンテンツの表示、目録の編集加工、著者目録規則及び目録データ作成等の面について、規範に

基づく管理を及ぼすことができませんでした。市場の変化及びデジタル資源の出現により、音楽映像資料の発展は大変大きな打撃を受け、音楽映像資料の地位を揺るがせました。

これらの問題を解決するために、管理部門は長年の試行錯誤を経て、音楽映像資料の管理グループを複数の部門に帰属させ、業務フローを切り分けました。10年のオペレーションを経た現在の状況は、中国語・外国語の二つの部門に分けて管理し、加工ポイントにおいてネットワーク・パッケージの二つの部門に分けて管理し、ネットワークリソースの収集、デジタル化加工、典籍の閲覧及び撮影・編集については、異なる部門にそれぞれ帰属させるということになっています。

七、楽譜の自筆原稿

国家図書館所蔵の自筆原稿の内訳をみると、自筆楽譜の数が大変少なくなっています。最も価値のあるものは傅雷⁴氏より間接的に御寄贈頂いた、近代作曲家・譚小麟⁵の自筆楽譜3種類200頁あまりです。2011年4月17日、国家図書館と上海音楽学院が共同で主催した“譚小麟・生誕百年記念シリーズ学術イベント”が、上海音楽学院で執り行われました。このイベントには、自筆楽譜の展覧会と関連する学術研究会が組み込まれ、作曲家の自筆楽譜がこれら研究において重要な地位にあることを際立たせる形となりました。

最近、国家図書館も自筆楽譜を収集しておりますが、整理方法については検討中であり、またこの種の出版物を重点的に所蔵するかどうかについても検討中のところでもあります。

音楽映像資料の収集、組織及びサービスは大変特殊な業務であり、多くの特殊な問題について解決が必要です。私たちは日本の同業者の皆様と一緒に検討し、最良の業務モデルを模索していく所存でございます。

⁴ 傅雷（1908-1966）作家、翻訳家、教育家、美術評論家。バルザックやロマン・ロランなどの著作を翻訳。

⁵ 譚小麟（1912-1948）作曲家。1939年米国に留学、1946年上海国立音楽専科学校（現在の上海音楽学院）教授。中国伝統音楽と20世紀ロマン派を融合させた作品を残す。